

ヲ配當申サントテ、三汁七菜ヲ送ラレケル、光義卿仰セニ、婦人ノ知ラル、事ニ非ズ、吾一汁二菜ノ國中家士及ビ農商迄ヘノ手本也、又養生ノ義ハ、一汁二菜ノ中ニ專ラ其心ヲ盡シケルニヨリ、申サル、迄ニモ及バズ候、併ナガラ送ラレシ膳ヲ、只返サンモ無禮ナレバ、家士共ニ給サスベシ、返辭ハ對面ニ申ベシトテ、使ヲ歸サレケル、其後御對面ニテ仰ラレケルハ、人妻トナリテハ、其夫ニ養ハル、物ナルニ、其妻ノ膳ヲ送ラル、トテ、喰ハル、ベキヤ、時ニ臨テ饗應ナドハ格別、向後右様ナル事無用也ト仰セラレケル、

〔近世叢語德行〕綾部道弘、自處節儉、不喜華飾、嘗有人遺彩服於其子、遂不許服、曰先君貧素、卽世、吾亦辛勤多年、幸享俸資、煖養兒女、是君之惠也、夫人情難於儉、而易於奢、予非不愛兒也、不欲使習奢耳、

〔續近世畸人傳二〕松岡恕庵

恕庵松岡氏、名は玄達、略博覽好古、儉素淳樸の人なること、人のまゐる處也、今其眞率なる二三條を擧ぐ、大きな倉を二ツたて、一ツには漢の書、一ツには國書を藏られしほどのことなれども、火桶は深草のすやきを紙にてはり、用ゐられし、又男善吾名は典、字は勅、號復眞、幼年より、絹のたぐひを著せず、袴も夏冬となく、麻にて有ければ、門人たち、あまり見苦しとて、よろしき袴を送りければ、先生是を見て、われ仁齋先生の講席に出し時、東涯いまだ幼して、先生の側にあられしが、白き木綿の布子、白き木綿の袴也、是をおもへば、善吾は染色衣たるは奢也とて、かのよき袴は、著せ給はざりけるとぞ、

〔有徳院殿御實紀附録二〕御受職○德川吉宗の後、唐破風造の四足門、および有來る御まし所をもこぼたれけり、これそのかみ、勘定奉行萩原近江守重秀うけたまはり、金玉をちりばめ、華美を盡して、造營せしかば、その費用七十万金に及びしとなり、又後園に沈香もてつくりし亭ありしをもこぼたれ、芝口に建られし郭門も、火にかゝりしのうち、ふた、び建られざりし、皆近世華奢の風を、宗